

第7回「こども計画(仮)」を考える市民ワークショップ

【日時】 令和6年6月26日(水) 午後19時00分～20時50分

【場所】 市役所地下1階 市民ホール

【出席】 27名
市民19名(うち3名Zoom)、所管課1名、事務局7名

【概要】

令和6年度「こども基本法」に基づく市の「こども計画」の策定が必要となるなか、市民の参画や関与を得て、より実効性ある取組みとするため、第7回ワークショップ(毎月1回程度開催を予定)を開催した。

【詳細】

1. 開会あいさつ(こども未来部長)

「こども計画(仮称)」や「教育振興基本計画」策定に向け、こどもたちに出来るだけ良い学びや成長の機会、環境を整えたい。

立場や想いは様々と思うが、より良い取組みに繋げるよう、忌憚ない意見を賜りたい。

2. 自己紹介(各自から氏名、所属団体など)

3. 資料説明～意見交換

- ・ 高山市の学校教育について(学校教育課長)
- ・ こどもの意見聴取、こども計画体系(案)などについて(こども政策課長)

今回はグループを分けず、Zoom参加者を含む全員による対話を行った。

次回第8回は、7月25日(木)同時刻、地下市民ホールで開催予定

意見のまとめは別紙のとおり

以上

○参加メンバー、→学校教育課長、⇒こども政策課長

<不登校について>

○不登校児童生徒に関して、今の学校では、こどもと保護者、教員の皆が幸せでないと感じる。「であい塾」や「にじ色」も対処療法的であるため、学校そのものがもっと良くなる必要があると思う

→登校した際、こども達の顔を一人ひとり確認し、しっかりと状態を把握できるようにしている。
また、チームとしてこどもと接するようにしている

→「こころのアンケート」を活用した個々の状況などの把握、担任以外でも心の声を把握するための「マイサポーター制度」など、様々に対応しているところ

○こどもはこどもでいる時間が短いため、ぜひ取組みのペースを上げてもらいたい

○不登校児童生徒のなかには、「こころのアンケート」を書けないこどもも居るのではないか

→複数の目で見ていくなど、どれだけでも把握していきたい

○文字では答えられないこどもも居るため、アンケートの取り方も様々に配慮する必要があると感じる

○こどもたちの安心感に繋がり、学校へ行くためのステップを踏めるため、「であい塾」や「にじ色」があることはとても良いと思う

○日々、学習障がいの子どもと関わるなか、感じていることを話したい。「にじ色」は、全国的にはまだ稀な取組みで、画期的と捉えている。ハード面の「こどもの居場所」に加えて、学校現場でのソフト面での取組みについて、どう充実させていくかが課題と感じている。先生方は一生懸命勉強され、大変ななかで苦勞されている。今後は、「チーム力」がポイントとなってくる

○「にじ色」と「であい塾」は、出席扱いになるのか

→「にじ色」は出席、「であい塾」は出席扱いとなる

○他にも市内には、NPO法人などが運営する「こどもの居場所」もあるが、「出席扱いになる場所、ならない場所があるのはどうなのか」といった意見を聴いている

○「にじ色」「であい塾」を利用するには、転校が必要となるのか

→「にじ色」については、宮中学校へ転校する必要があるとあり、転校は重い決断と捉えている。生徒や保護者と十分話し合いをして決めている

○「にじ色」のリーフレットに書かれた「誰かに合わせるのではなく、あなたが選べる、新しいスタイルの居場所」は、とても大切と感じる。学校が楽しいこども、学校へは行かない選択をしているこどもなど様々なかで、「にじ色」と同じような取組みを各学校でもできると良いと思う
先生方もありのままの状態で居られることが大切であり、「居場所」の選択肢はあればあるだけ良い、一人ひとりにそういった対応ができると良いと感じるが、広げていくような考えはあるか
→未定だが、こどもが「居場所」を見つけられるようにしたいし、各学校での未然防止の取組みも大切と捉えている

→人が会おうのは学校だけではなく、地域や全国、様々な所で出会いがある。様々な場所で様々な人と知り合うことで、「ここが自分の居場所」と感じられると良いと思う。

○「であい塾」や「にじ色」は、学校の許可がないと見学できないと聞くがどうなのか

→あらかじめ訪問日時を調整したいなどから学校への相談をお願いしているもので、許可が必要といった意味ではない

○上宝から一之宮の「にじ色」は遠いため、「こどもの居場所」は、市内にもっと沢山あると良いと感じる

→様々な場所については、今後検討していきたい

○こどもは、親や住む場所が選べないため、受けた教育の場へ行くための交通費の助成などが必要と感じた

○「こどもの居場所」に携わっており、利用者が、毎日起きれるようになった、テンションが上がる、毎日が楽しくなったと言ってくれて嬉しかった

こどもそれぞれに、楽しみとを感じる場所が違う、人によって休憩のタイミングも違うため、それが普通のこととして、様々な選択肢が認められるような環境になることを願っている

○自分のこどもは、学校や友達、給食が大好きで学校へ行っていたのではと思う

様々な話を聴き、学校に行けることは当たり前ではないと実感し、皆が多様性として認め、先生、保護者や地域が、こどものために真剣に考えていることを理解してもらうことが大切と感じる

<こども計画について>

○「こども計画」について、市としてどういった取組みに力を入れていくのかが見えない

⇒力を入れていく取組みなど具体的施策は、庁内で調整中のため、計画策定の進捗のなかで今後示していきたい

○多くの情報を集めることが大切であり、主任児童委員などからも話を聞くと良い

⇒主任児童委員の皆さんは日頃から関わりがあるため、意向を把握し、取組みに反映している

○保護者アンケートの回答が率直で驚いた

⇒今回からウェブ回答とした（紙の時と設問の量は同様）が、回答者の負担感が重くなってしまったようで、不満がつい出てしまった自由意見が多い印象で反省している。事実を承知してみえないことに基づく意見もある

<切れ目ない支援について>

○私は、脳や神経由来の症状などを見るのが専門のため、そういった知見を先生や家族と共有し、「安心」に繋がるようにしている。今後、重要となるキーワードは「安心」と考える

○読み書き障がいと同じで、「こころのアンケート」を書けないこどもは多く居る。読み書きが苦手でも、学校では見せないようにしたり、家庭でも言い出せないことが多い。読み書きの習得状況を客観的に見ていくことが大切であり、昨年度から担当の先生方と検討している。

○保護者から「卒園したこどもが、学校へ行きたくないと言う」といった話を聞くため、園としても様々な「こどもの居場所」や支援があることを知って、伝えていく必要があると感じた

○就学に向け、保育士と学校の先生で引継ぎをしているが、改めて連携の難しさを感じた

○園では主体的な保育を意識しているが、就学すると45分座って一緒に受けるなど、ガラッと雰囲気が変わり、戸惑うこどもが大勢居るのではと感じる

→以前の「中1ギャップ」は、今は「小1ギャップ」と言われ、課題が大きくなっている印象

就学にあたっては、保幼小で連携して引継ぎしているほか、今年度からは、教育委員会の一部職員がこども未来部と兼務となり、一層連携を密にしている。一步一步進めていきたい

- 「小1ギャップ」について、他県で例があるように、生まれ月によって学級を分けるといったことも考えられるのではないかと
- コロナの影響で園児の社会性が低くなっていると感じるため、成長に欠かせない経験として、積極的に外出し、様々な人と関わるようにしている
- こどもを産む前からの取組も必要と考え、助産師を保育園に招き、妊娠中や産休中の保護者と話をする機会を設けている。高山市のこどもを増やすため、地域や社会での保育園での役割を考えながら活動している。様々な悩みがあるなか、たくさんの「居場所」があることが望ましいため、どういった保育園があるべきか、考えていきたい
- 学校の先生だけが頑張ることではないと思っており、それぞれの立場で、何ができるのか考えながら、一步一步進めていきたい。保育の世界も徐々に変わってきているため、お互い協力しながら進めていきたい
- 今日、小学校に授業を見学に行ってきたが、「よく45分間座ってられるな」「もう少し、こどもたちが主体的に学べると良いのでは」と感じた
→小学1年生で、はじめ（集団の一番下）に戻るのではなく、保育園では年長として生活してきたため、その延長として、活動を広げていくことも大切と感じる
- 療育や支援学級の先生に、スペシャリストが入ること、スペシャリストを育てていくことも大切ではないか

<給食について>

- 自分のこどもが低学年の頃から学校給食が合わないが、食べ残すことを許してもらえず、長い間とても苦しんでいたことが、かなり後から分かった。栄養バランスなどを考えてのこととは思いますが、世の中が変わってきているなか、市内の学校では「食缶を空にするのが良いこと」といった文化がまだ残っていると思われるため、不登校の原因などとなってないか確認してほしい
→給食は、子どもにとって楽しい時間であるべきため、苦痛になるようなことは無くしていきたい
- 給食も教育の一環として、こどもが楽しんで食べられると良い

<その他>

- 保育園で学生を受入れているが、活動を通じ、一緒に成長できる機会となっている
- 部活動の地域移行については、専門の大学教授に意見をもらうことが大切と思う
- 体育の苦手なこどもへの対応が、他の教科と比較して遅れているように感じる。体育教師から「運動の苦手なこどもに対する教え方が分からない」といった話を聞いている。少人数に分けた体育の授業など、考える必要があるのでは
→体育実技指導についても、教師の間で教え合える時間なども作れるようにすることが、教育委員会の仕事であり、進めていきたい
- 今日、ベテランの先生による授業を、若い先生がたが見て、考え方や技術を引き継いでいく場に参加したが、学校ではそういった取組みもされている

以上